それから

（続・李さん一家）

つげ宛春


いつもの放浪癖がでて
ボロ家をとび出してから
三カ月がたっていた


ボロ家は
三ケ月前と
まったく変わり
なかった


ぼくの留守に李さん一家は二階から一階にこしてきたらしかった
四人は当然のことのようにそこにすわっていた
しかたないのでぼくは二階に住むことにした


しかし
そこにもまた
当然のような
顔をして
すわっている一人の
女の子がいたのだ
SKETCH


ぼくは
何か言おう
としたが
まるで
ぼくのほうが
闖入者のよう
な後ろめたい
気がしたので
何も言えな
くなった

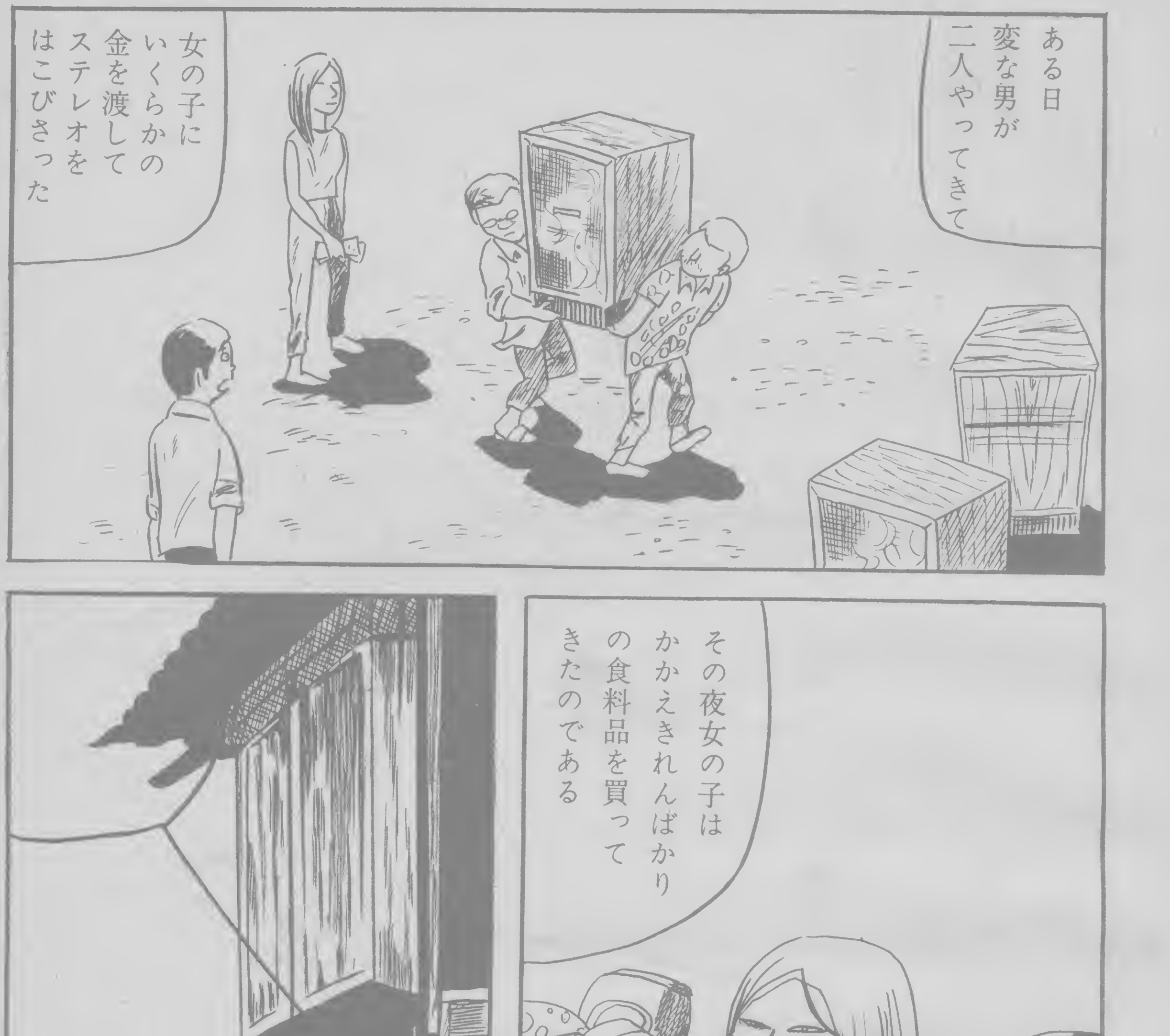


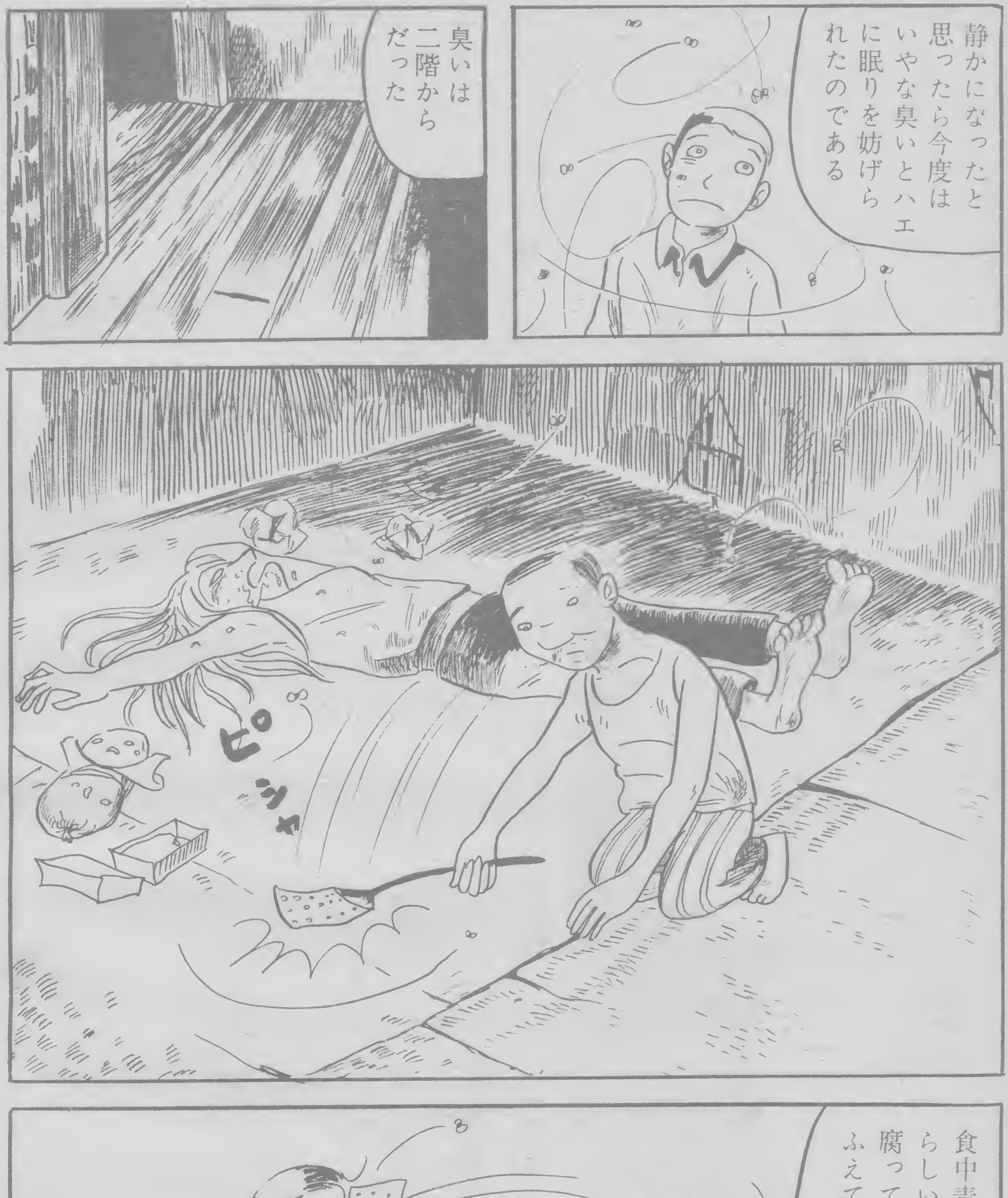
僕がどうしようかと迷っていると李さんが出てきた
困った時はお互いさまです
うちの廊下をつかって下さい
別にかまいませんから
そのうちなんとかなるだろうと思いしかたないので僕は狭ッくるしい廊下に寝起きすることにした
その夜僕はなかなか眠れず、ようやくうとうとしはじめた
突然落雷のような音がして、ねむけが一ぺんにふきとんでしまった
ドドドドドーッ


その音は雷ではなくどうやらドラムソロであったらしい
続いてサックスピアノバスのアドリブがはじまった
音は二階から聞こえてくる
おどろいたことに六畳の部屋には十五、六万もするようなステレオがおかれていたのだ


女の子は
憑かれたよう
に聞いている
曲が終わると
同時に
スイッチを切り
ステレオに
もたれかかって
眠ってしまった
音は
夜だけでなく
時々昼間にも
すさまじい
音をたてて
ボロ家を
ゆさぶった
しかし
李さん一家は
まったく意に介さ
ない様子だった


その女の子もそうとう飢えているらしかったそれは僕が時たまパンを食べているときの彼女のもの欲しそうな目を見ればわかる
庭の野菜をとる様子もなく水ばかり飲んでいるようだった
見かねて僕がパンをさしだすと一瞥しただけでしらん顔して通りすぎてしまった
女の子はなかなか出そうにもなかった


ある日
変な男が
二人やってきて
女の子に
いくらかの
金を渡して
ステレオを
はこびさった
その夜女の子は
かかえきれんばかり
の食料品を買って
きたのである
それからという
もの、まったく
静かで、人の住んで
いる気配さえなかった

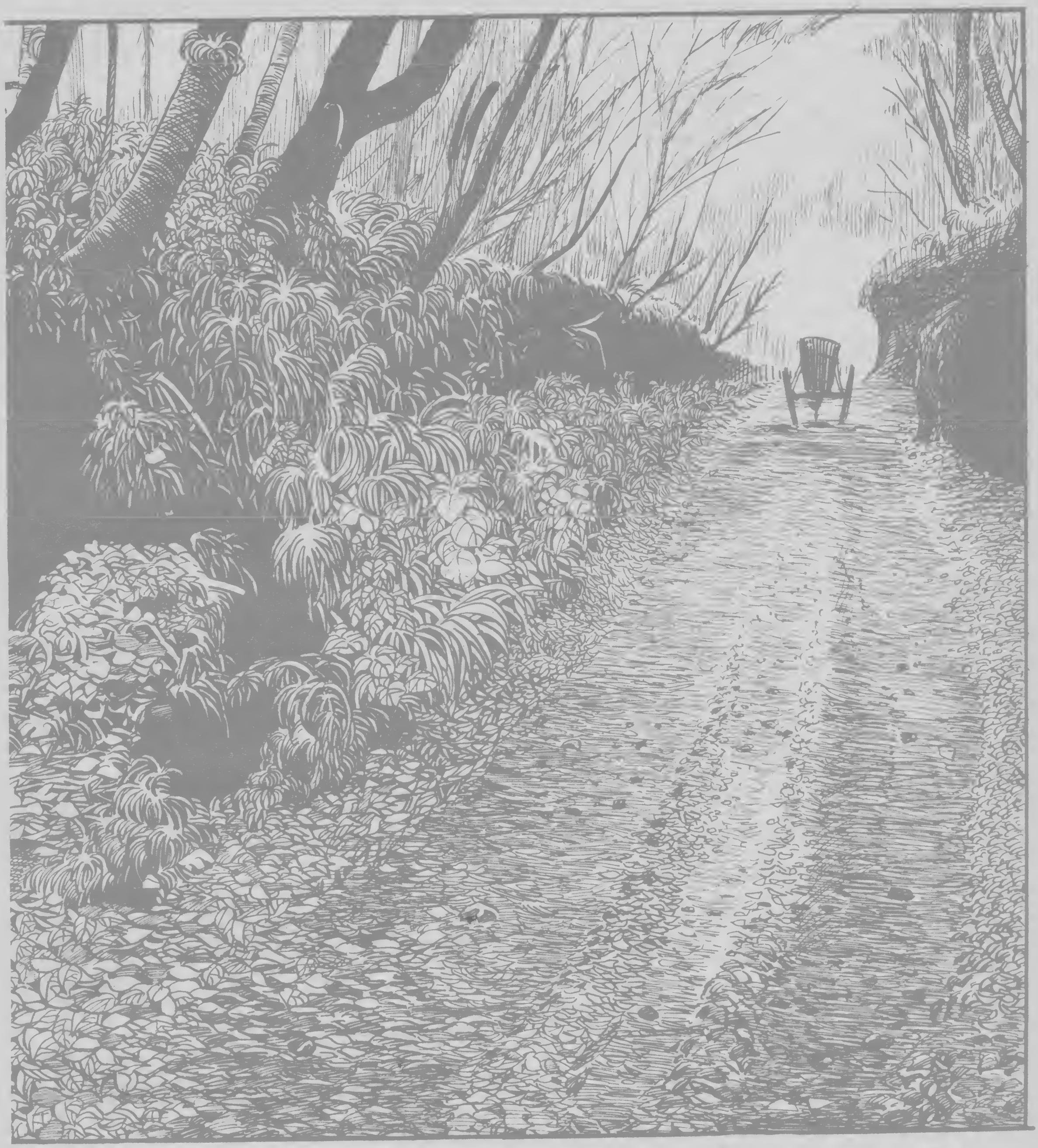

静かになったと
思ったら今度は
いやな臭いとハエ
に眠りを妨げら
れたのである
臭いは
二階から
だった
ピシャ
食中毒で死んだ
らしいのですが
腐ってきて、ハエが
ふえて困ります


ハエはきらいです　と彼は言った
死体をかたづけなければなんにもなりませんよ　僕はなんとなくそう言ってしまった
李さんはなるほど、と感心したように、ではかたづけますと言った
女の子の死体は李さんによって大きな石をのせられ裏庭の土中深く埋められた



完

つげ先生の寛大なお心に感謝いたします
つりたくにこ



鬼太郎夜話

水木しげる　水木プロ製作